

Title	デカルト哲学におけるコギトと他者について
Author(s)	山口, 信夫
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 12 P.1-P.15
Issue Date	1978-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4895
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

デカルト哲学における

コギトと他者について

山 口 信 夫

—

デカルト哲学において、コギトと他者とは奇妙な取合せである。他者問題は主題化されておらず、他者 (*autrui*)、他我 (*alter ego*) などの概念は見あたらない。さらに、デカルトのコギトは、他なるもの (*autre*) とは無縁で自らの内に沈潜しそこに安住するもののように思える。デカルト哲学には、他者の契機どころか他なるものの契機すらなく、同一化の契機はあっても差違化の契機はないということになるのだろうか。

他者問題は主題化されておらずとも、それでもなお、『方法序説』五部、『省察』二部三部などで論じられている。他者概念に当たるものとしては、他の人間あるいは真の人間 (*les autres hommes, le vrai homme*) という語がみられる。また、デカルトのコギトが同一化の歩みであるといえるのは、『省察』二部における「我存在す、我実存す」⁽¹⁾ (ATVII, p. 25) の箇所まづのことである。それ以後では、「がある」としてのコギトが、いかなるもの「であ

る」かを探究するのである。存在規定からその本質規定への、さらには同一化から差違化への展開といえる。なぜなら、非我としての神と物体との弁別を通してはじめて、コギトは自らの本質を規定しうるからである。

しかし、何故、他者問題は主題化されていないのか。何故、神と物体との存在証明と共に他者の存在証明がないのか。それは、前者の証明がそれらの観念の明証性に根拠を置くのに対し、後者のそれは他者観念の明証性にはなく他者についての経験や判断に根拠を置くがためである。前者の問題は真理の問題として『省察』にその場を見出すが、他者問題は経験の問題として主題化の背景、底流に押しもどされる。経験的判断の問題をも扱う『序説』に他者問題がよりくわしく論じられるのも、この故である。だから、他者問題については、この両書を相補的に検討しなければならぬ。

さらに、他者問題が背景的なものであるからといって、重要性がそれだけ劣るものではない。結論的にみれば、デカルトは他者確証の基準を、言語さらにはこれを支える理性に求めた。彼は、この基準を身体に求めるフッサールやメルロー・ポンチ⁽²⁾とは、この点で異なるのだが、他者を言語の問題に結びつけたのは興味深いものがある。この言語の問題もまた主題的に論じられることなく、観念の問題として『省察』に展開される。この故に他者問題は観念の基盤となるコギトと密接な関連をもつに至るのである。

メルロー・ポンチは、コギトと言語の関係を問題化し、沈黙のコギトと顕在化したコギトを言語において関連づける。「語られたコギト……の彼方にたしかに沈黙のコギト、私による私の体験が存する」⁽⁴⁾。この沈黙のコギトは、「すでに獲得した思考を表わす二次的な言葉」によってではなく、「思想を他者に対してと同様に我々自身に対してもまず初めに存在させる原初的な言葉」⁽⁵⁾によって指示されている。このように背景をもち「時間的厚み」⁽⁶⁾を与えら

れたコギトは、普通の意味でのメルロー・ポンチによって解釈されたデカルトのコギトではない。彼はデカルトのコギトを批判し、それに超越的主観という歴史的定位を与えた上で、自らのコギト像を彫塑するからである。彼の批判は、デカルトのコギトにおいては、「本質と存在との関連が、経験のなかではなく無限者の観念のなかに見いだされる⁽⁷⁾」という点にある。この故にこのコギトは超越的主観となり対象を構成するものとなる。それに対して、彼のなす事実性への注目は対象の構成ではなくその記述を復権させ、「現象の承認は……一つの反省理論と一つの新しいコギトを含む⁽⁸⁾」という。コギト・エルゴ・スムにおけるコギトは、「反省するすべての人間の私」のものであり、コギトの真の形式は「人が考える故に人が存在する⁽⁹⁾」である。この故にメルロー・ポンチもまた自らの新しいコギト像を形成する権利を得ていることになる。

コギトとコギターツムとの分離を主眼とする彼のデカルト批判は、自らの解釈をもつばら『省察』二部に依拠させることに由来する⁽¹⁰⁾。「我存在す」の*ego*を完全自動詞とのみ解し、これを充足するものとみなし無限者に関係づけている。コギトを彼のように二部にのみ限定するのではなく六部までの展開のうちにみると、この*ego*はいまだに属詞をもたない不完全自動詞として現われる。これが完全自動詞でありえるのは、悪霊との対決にあるうちだけである。このように*ego*を考えると、デカルト哲学のうちに、他なるものを、一種の志向性を見いださないうちか。メルロー・ポンチがデカルト批判の後に、自らのコギトのうちに認めたものの全部ではなくとも幾分かはデカルト自身のものではなからうか。以下、他者問題を通しこれを見てゆこう。

『序説』五部での他者論は、動物と人間の弁別すなわち動物機械論の主張に際して展開される。デカルトは、『世界論』『人間論』の要点を開陳しつつ、宇宙から人間にいたるすべての事象の機械論的説明を意図する。物体の秩序に従うかぎりでの人体もまた機械とみなし、このような機械と真の人間の弁別は何によって可能かと問う。さらに、動物と機械との同一性の故に、人間と動物とが魂あるものと機械的事象にすぎぬものとして弁別される。

人間と機械の弁別手段には二つある。「その初めは、機械が言葉を使用することや他の記号を組立てて用いることがけつしてできないであろうということである」(ATVI, p.56)その第二は、「機械がある一つの事を人間以上に巧みにやるがそれとは別のことをなしえないということから、「機械は認識によってではなくたんにそれらの器官の配列によって動くということがわかる」(Ibid. p.57)という点にある。言語と認識による行動との二点に求められたこの弁別基準は、つづいて動物と人間に適用される。この二点は、聾啞者や狂人をも含めてすべての人間に認められるが動物には見出せないとの理由で、人間と動物は弁別される。

他者論の観点から重要なのは、この二つの弁別基準である。これは、動物と人間との弁別だけでなく、真の人間すなわち他者の認識をも可能としているからである。この両基準はともに人間(他者)の理性を予想せしめる。認識による行動は理性による状況への対応を示す。「理性はあらゆる場合に用いられる普遍的道具」(Ibid.)ということになる。この基準は理性と外部世界との関係から考えられているが、言語はそれに対して理性による他者への自己表出という観点から考察されている。この点からして、言語の問題は他者論において一層本質的なものとなっている。デカルトは、他者への自己表出としての言語に二つの側面をみる。第一に、我々が言語や他の記号を用いるのは、「自分の考えを他人(*les autres*)に言明するため」(Ibid. p.56)である。さらに、かささぎやおうむは「自分

の語っていることを自分が考えているのだと確認しながら話すことはできない」(Ibid. p. 5)が、我々人間はそのように自己確認している。情報伝達と自己確認というこの言語の特質のうちに、デカルトの他者論の要点が存する。他者を動物や自動機械ではなく人間と認めうるのは、まず言語の伝達性による。語るものは何らかの記号によってその記号の意味内容を伝達する。だが、他者認識に際しては、直接には、記号の意味内容ではなく、記号の形相的側面が問題となる。記号の制度的側面ではなく、記号を操作する意識主体としての形相的側面が注視されるのである。この形相性は、言語の自己確認性に依拠している。しかし、他人が彼自身の語っていることを意識しているのだなどと、何故私が確かめるのか。自己確認は、絶対的には、私だけのものではないか。それ故、デカルトの他者論には類推の契機が存する。これを類比的統覚⁽¹¹⁾といつてもよいが、その媒介項は身体ではなく言語作用という精神である。まず言語における自己確認、すなわち言語活動におけるコギトの経験があり、他者の言語のうちに私の経験を追認するのである。

デカルトの指摘する言語の特質は、それ故、個人の言葉としての言(Parole)と制度のそれとしての言語(Langue)などではなく、いかなる記号によるものであれ、その記号から成る言語と意識との関係なのである。彼の問う言語は「自然的傾動にはなくただ思考に帰されうる何ものかを、声や記号によって指示する真の言語(vera loquela)」(ATV, p. 278)なのである。この真の言語は、言語学の対象ばかりか、思考にのみ帰されうるものを指示しておれば、原理的にはいかなる記号によるものも包括している。いわゆる言語を誤謬の原因の一つに挙げる(ATVIII-1, pp. 37-38)彼にとって、真の言語とは思考とそれの記号的表出との力動的な関係のうちに存することになる。だから、言語も他者も主題的に論ぜられることはなくとも、コギトの問題のうちにそれらが見られる。なぜなら、デカルトのコギ

ト論は、メルロー・ポンチのいう沈黙のコギトがいかにかに語られたコギトになるかを示しているからである。

このように、他者認識の基準が言語にあり、この言語は情報伝達と自己確証という特質をもつが故に、デカルトの他者問題はコギトに関係づけられる。『序説』に展開される他者論は、形式的には他者の言語から理性へと遡及的に進行する。しかし、この言語が思考に帰されうるものを指示していると認めさせる標識は、他者の表現した言語のうちにはだけあるのではない。他者認識を行うもののコギトの経験にもある。それ故に彼の他者論を検討するには、『序説』の外から内への他者論だけでなく、『省察』の内から外への他者論をも相補的にみなければならぬ。『省察』において、コギト、コギトの自己対象化としてのコギターツム、このコギターツムの形態化としての観念、観念の本質規定と因果律による観念対象の存在、といった内から外への過程のうちに、他者がいかなる位置を占めるかを検討しなければならない。

三

『省察』における他者論に移ろう。ここでも他者は主題的に論ぜられることはない。蜜蠟の分析に際し論じられるだけである。しかし、他者認識はここでも言語とコギトの問題に関連している。

まず蜜蠟の分析をとり上げよう。この分析は、物体の本性の探究のためにはなく、コギトとして明晰に見出された私の本性を判明に知るためになされる。考えるものは同時に存在するものでなければならぬとの直観的把握のあとで、このコギトの本性が検討される。「では、私とは何か。考えるものとは何か。すなわち、疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、また想像し、感覚するものである。」(ATVII, p. 28) この

ように規定される思考様態のもつ対象の存在性は、ここ『省察』二部では問われることなく、もっぱらこれら様態とコギトとの関連が検討される。この分析はこの観点からなされる。火に近づけられた蜜蠟は様々に変様する。味は消え香りは抜け、変色変形し、大きさは増し液化する。熱くなりたいたいても音がしない。感覚では、このものを把握できない。また蜜蠟を広がりとして規定しても、この広がりは無規定に変化するから、想像力では把握できない。

思考のいずれの様態をしても、蜜蠟をそれと判定しきれない。それでもなお多様に変化することと同じ蜜蠟であると判定している (Ibid. p. 30-31)。ここで問題なのは、これを無規定な広がりとして判定することではなく、変化を経てもなお同じ蜜蠟であるとの意識の方である。この意識は何に根拠をもつのか。「蜜蠟の知覚 (perception)」とは視覚でも触覚でも想像力でもなく……ただただ精神の洞察 (inspection) であらう (Ibid. p. 31)

ここにおいて洞察という動的性格に注意すべきである。また、この精神の洞察を知性と置きなおしてもよいが、その場合には知性の作用的面を示しているのであり、知性を感覚や想像力と並列に並べ別の能力とみるべきではない。精神に部分はなく、「感覚的であるその同じものが理性的なのであり、精神の欲求のすべては意志なのである。」 (ATX, p. 364) それ故、感覚、想像力、知性は重層的構造をもつと考えるべきである。思考のすべての様態の根底には、コギトの本性としてのこの洞察性が存する。感覚としてこの洞察性を根底にもつが、感覚はその対象に向かう性格によりこれを判明には示さない。知性とても同様である。その対象に向かう限り知性の作用それ自身には気づいていない。今は思考様態の対象ではなく様態とコギトの関連が問題なのであるから、様態の示す対象的性格を排除しコギトを純化する必要があった。蜜蠟の分析はこれを行なったのである。「洞察は、この洞察を成立させているものに向けられる私の注意の多少に応じて、以前のように不完全で混雑したものであったり、あるいは現在のように明

晰で判明なものであったりする。』(ATVII, p. 31) 洞察は、コギトの有している何もかをも思考(感覚、想像、理解)しているとの自己意識、すなわち自己確証的性格を動的に表現し、コギトの作用それ自身に向かっている。『省察』二部におけるコギトは何ものかについての自己意識なのである。このコギトは、悪霊を契機に自己の存在性を見出し、蜜蠟を契機に自分が向かう対象を思考様態に応じ様々に知覚する。その際、知覚の結果の正当性は問われていない。このように考えると、自らの語っていることを自分が考えているのだという言語における自己確証性と、対象をそれと知覚しているとの意識としての洞察とは、同じものとなるのである。

これまでのコギトの過程は、メルロー・ポンチのいう沈黙のコギトでありあるいは内なる言語といってもよいであろう。デカルトがこれについて語っている『省察』の言語はメタ言語である。もちろん、言語なくして思考はできないという問いは成立するが、それは問題の位相を異にする。蜜蠟の分析につづいて、この沈黙のコギトと語られるコギトの関係が他者問題を通して論じられている。この箇所をすぐれた分析の助けを借りて読みとり、他者とコギトの問題をみよう。

この洞察の経験を語るとき、すなわち沈黙のコギトから語られたコギトへの生成を語るとき、「たいてい、日常の話し方によって欺かれる。』「確かに、我々は、蜜蠟が現前すれば蜜蠟そのものを見る(videre)と言ひ、色彩や形態からして蜜蠟の現前を判断する(judicio)などは言わない。』「このことから、それ故に蜜蠟を視覚(visio oculi)によって認識し、精神のみの洞察(solius mentis inspectio)によって認識しているのではないとただちに結論してしまったことであろう——もしもかつてたまたま通りを過ぎ行く人々を窓から注視する(respicio)ことがなかったならば。もっともまたしてもこの人々そのものを蜜蠟の場合と同じく習慣に従って見る(video)と言うのではあるが。』

「しかし私は帽子と衣服以外に何を見ている (video) というのか、その下には自動機械が潜んでいるかもしれないではないか。しかし私は人間がいるのだと判断し (judico) ている。かくして、私が眼で見ている (video oculis) いると思っていたものを、私の精神のうちにある判断力 (Judicandi facultas) のみによって把握し (comprehendo) ているわけになる。」(Ibid. p. 32)

これが他者問題を論じた問題の箇所である。この箇所の理解の要点は、⁽¹³⁾二点ある。その一つは、visio oculi, video の語群と inspecio mentis, respicio, judico, judicandi facultas, comprehendendo の語群とを対立的に理解することである。第二は、respicio の出ている一文が、この場合は過去の事実をそうでないと仮定して述べた接続法完了形 (respexisse) であるという点にある。過去において私は通りを行き過ぎる人々を注視し (respicio) 人間と判断した経験がある。しかし、これを語るとき制度化された言語の習慣に従い人々を見る (video) と言うのである。

この箇所の主題は、沈黙のコギトから語られたコギトとなるときに生じる言語の問題あるいは言語への不信である。この制度化された言語への不信の故に、デカルトはこの両者の関係を直接に言語にはみず、言語の手前にある観念のうちにものである。これが『省察』三部以後で展開される観念の明証性への問いである。この両者の関係は、ゲルールの指摘⁽¹⁴⁾に従い、現実化されたコギト (cogitio actualis) と客観化されたコギト (cogitio obiectiva) との関係といてよいであろう。

この他者論は、蜜蠟の分析の傍証として、偶然に出現したものであろうか。他者認識ではなく、例えば物体の認識でもよかったのであろうか。この問題はコギトの言語化の過程である。他者を注視することのまなざし (regard) は、同時にその他者ももちうるものとの類推が働いている。他者の言語の形式がもつ自己確証性は、注視する私が経験

しているこの洞察性に類似している。この故に、観念の形式的側面より内容の明証性が問題となる物体は、ここには不適である。他者問題は沈黙のコギトと語られたコギトの関係には必然的なのである。

『省察』三部以後では、コギトは観念へと変貌する。現実化されたコギトから客観化されたコギトへの展開である。デカルトの観念についての論述は、観念とコギトとの関係と観念とその対象との関係の両者を含むが故に、複雑なものとなっている。だから、あらかじめ観念の構造を明らかにした上で、他者が観念のうちいかなる位置を占めているかをみよう。

デカルトの観念は両義的性格をもつ。質料的にみれば観念は知性の作用であり、表現的あるいは形相的にみればこの作用によって表現されたものである (Ibid. p. 8, p. 232)。表現面としての観念は当然として、何故作用としての観念を認めるのだろうか。これは観念とコギトの関係を強調するためである。思考とは意識であり観念とはこの思考の形相であるとの定義 (Ibid. p. 160) は、この関係に留意している。また、彼がすべての観念の生得性を主張する (ATIII, p. 418) のも同様である。観念とは、この故にコギトの変様としてのコギターツムとなる。

観念がコギターツムすなわち意識様態 (cogitandi modus) とみられるかぎり、キマイラのような普通の意味での観念以外に、意志、感情、判断をも含む。このことはきわめて正当であり、デカルトの展開する観念に関する議論は感覚や情念を排し純化された知的概念のみを称揚するものではない。情念なども含めた観念とその対象の関係の正当な把握がその真意である。この故に、彼の観念への省察は、神や物体で終わるものではなく、『省察』六部での感覚の検討、さらに『情念論』での情念の検討へと継承されるわけである。しかしながら、本来的に観念の名にふさわしいのはものの像 (imago rerum) である (ATVII, p. 37)。この観念はコギトとの関係からみられるとすべてが生得

的といわれたが、その対象との関係から考えると生得的、外来的、作爲的と分類される(Ibid. p. 38)。

このようにして、デカルトはコギトと観念の関係から、観念とその対象に移る。これを實在性の関係からみれば、観念がコギトでもあったが故に有している形相的實在性から観念とその対象の存在論的關係を示す表現的實在性への移行である。さらには、この表現的實在性ともそのものの形相的あるいは優勝的實在性との関係への注目である。ところで、観念が表現的實在性をもつということとこの實在性がいかなるものかということは、一応別である。前者は、コギトの形態化である観念がその観念を生じさせるならかのもとの存在論的關係を有することを意味する。後者は、この観念の原因であるものの何性を観念内で規定することなのである。⁽¹⁵⁾ 他者認識に関しては、他者が何であるかより以前に他者が存在するかと問うかぎりにおいて、前者の方が重要である。

この問題を当面の課題に従い、観念と言語の関係のうちにみよう。私が語ることを理解しながら言葉(verbium)によつて表現しているものは、この言葉によつて意味されている観念であるとデカルトが指摘するとき(Ibid. p. 160)、彼は言葉を意味するもの、観念を意味されるものと考えている。もちろん、この言葉はいかなる記号でもよいわけである。この意味されるものとしての観念は、表現的實在性であり、言葉とはこれの記号化である。

デカルトは、観念の種類を、私自身、神、物体的で魂なきもの、天使、動物、私に類似した他の人間と枚挙し、他の人間、動物、天使らの観念は「私自身と物体的なものと神とについて私が抱く観念から複合できる」(Ibid. p. 43)という。では、他者は何によつて複合されるのか。私自身と物体との観念からであろう。神の観念も無関係ではないといえるが、この意味でなら私と物体の観念も神の観念に無関係ではないといえるからである。このうち物体の観念は他者認識においては付帯的である。他者と私との身体的類似性は、動物と私との外的行動のすなわち身体

上の類似性にすぎないから、他者を物体の観念のみでは人間として認めることはできない。

残るものは私の観念である。思考するものとしての私の観念から他者の観念を複合するとはどういうことか。これは他者も私と同じく思考するものとしてみることである。他者の言語は、まず音の集合として私に与えられる。私がこの音を注意深く聞くことにより、私の聴覚を通して精神の洞察が深まり、ついにこの音を言語すなわちなんらかの観念を指示するものと把握する。もちろん、この把握は、言語によってだけではなく、他者の認識による行動すなわち身体の記号的表出によってもありうるのである。では、この音の集合のうちに記号とその観念を何故感得しうるのだろうか。私自身が自分の言語経験すなわち観念の記号化の意欲を他者の言語活動のうちに追体験するからである。この体験は、私が意味されるものとしての観念に認めた表現的実在性を他者の言語に認めることであり、他者の言語を何ものかについての意識と確認することである。このようにして『省察』の他者論は『序説』のそれにもどりついた。

パランは、デカルトのコギトと言語を関連づけ、知性を観念に意志を記号に結びつけた。意味としての観念の把握を誤つのは、この観念の恣意的記号化をなす意志の越権の故だとい⁽¹⁶⁾うのである。この指摘は他者問題に関しては重要である。情報伝達としての記号の内容が観念を正当に指示しては⁽¹⁶⁾なくとも、この言語活動のうちに意味としての観念を記号化しようとする意志をみることにより、他者認識の地平が開けるからである。記号のもつ形相的側面が他者の意志を示しているためである。デカルトが他者観念を複合観念とみたのも当然である。私がコギトとしての自己の観念を経験において他者に複合するからである。意志の働きとしての複合が誤つことがあるのもまた当然である。本当にロボットにすぎないものを人間と誤認することだってありうる。問題となるのは他者認識におけ

る洞察性の程度である。自己の意志が他なるものの意志を洞察するとき、そこに「私に類似した他の人間」(ibid.)を認識するのである。

我々は課題を他者の存在の認識に限定してきた。それ故に、他者の言語の自己確証性、何ものかを意味する限りでの観念の表現的実在性、誤ちてもなお記号化しようとする意志に焦点を合わせてきた。他者の何であるかを問うとき、観念の表現的実在性の内容や自己の身体の観念的表現としての感覚や情念など、要するに観念の具体的内容が問題となろう。

四

最後にデカルトの他者論の特徴を検討しておこう。

デカルトは、コギトに何ものかについての自己意識と何ものかについての意識あるいはその意識の形態化としての観念という両性格を認め、他者の言語に同じものを経験することによって他者の認識の地平を開いた。これは一種の志向性であり、メルロー・ポンチの批判は全面的に当たっているとはいえない。デカルト的コギトは超越的主観ではなく観念の記号化を通して外部を志向している。また、言語による共同体の可能性は独我論との批判をも拒否する。死の年に作成した『ストックホルム・アカデミー草案』によれば、互いに相手を尊敬し語り合うことによって成立する知的共同体を夢みている(ATIX, pp. 663-665)。彼の共同体は、見る見られる関係よりは話し聞く関係のうちに見出されよう。それもマス・メディアを媒介とはしない個的精神の会話による共同体である。

デカルトは、アムステルダム都会の静寂を楽しむ。この町の人は彼には森の中の木に等しく、彼を不安にする

ものではない(ATI, pp. 203-204)。彼は人にまなざしを向けるものではあっても、まなざしを向けられるもの、見られるものではない。この点で、サルトルの他者論と異なる。サルトルの恥の分析が示す⁽¹⁷⁾ように、私が身体をもつこと、さらに他者がこの身体にまなざしを向けることによって、私は他者を認める。デカルトにおいては、他人に見られ、たとえ不安や恥が生じても、これらは主観性に還元され情念統制の対象となるので、サルトルのような仕方
で他者を確証する契機とはならない。

注

- (1) デカルトのテキストの引用はアダン・タンヌリ版に依り、ATと略記し巻数はローマ数字で示す。
- (2) 新田義弘『現象学』岩波書店一五一一―一五七頁。
- (3) Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, pp. 398-419.
- (4) *Ibid.*, p. 462.
- (5) *Ibid.*, p. 446.
- (6) *Ibid.*, p. 456.
- (7) *Ibid.*, p. 55.
- (8) *Ibid.*, p. 62.
- (9) *Ibid.*, p. 459.
- (10) *Ibid.*, p. 35, p. 41, p. 46, p. 50, pp. 52-55.
- (11) 新田義弘 前掲書一五二頁。
- (12) 所雄章「デカルト『省察』断章考」『思想』第六一八号(一九七五年第十二号)二四―四五頁。
- (13) 所雄章前掲論文二七―三〇頁。

- (14) Guéronlt, M., *Descartes selon l'ordre des raisons*, t.I, Aubier-Montaigne, p.155.
- (15) cf. éd. Alquié, F., *Oeuvres philosophiques de Descartes*, t. II, Garnier, p. 438, note 1.
- (16) Parain, B., *Recherches sur la nature et les fonctions du langage*, Gallimard, p. 87.
- (17) Sartre, J. P., *L'être et le néant*, Gallimard, p.317.

(大学院学生)